三尾重定編輯

新編

小學讀本第七

178
4
91

大日本教育會書籍館
二 六函
二 架
三 三號
九 册

三尾重定編

新編小學讀本第七

東京　教育書院藏

明治十九年六月十二日内務省贈付　教育書

新編小學讀本第七

三尾重定編

物ふいかならず。義務とゝふたゝ
あり。犬の夜を守り。鷄の晨を司る
ゑ。天然の定めなる。況ンや。万物のれ

いと稱する人に於をや

幼稚の時は幼稚のつとめあり壯年ニしては壯年の務あり老たるほどの務ありこの務を此務をなさゞる者は完全なる人といいふべからず

人ニ貴賤貧富ノ別アレドモ其家ヲ治ルニハ家内和合シテ各ソノツトムル處ヲ務メザレバカナラズ破レ損フモノナリ是ヲ人ノ身體ニ喩タル オモシロキ話アリ余汝ラニ語リキカセン汝等ヨロシク理會スベシ

一日手足集會して曰我ら終日困

苦して得る處の食物は甚せぐく腹の物となる。然るに腹は安閑として甚きを食ひ絶て我らに謝せるさとふし。腹何ぞ無情ふるや。今よ至は。腹のために務め勞せば。一たび腹をして困まむ至し。とぞはこの至ける

されば。足は食堂にゆこのず。手は箸をとらず。口は食を入るさせふく。齒は物をかむさとなし。目は食物を見ぞ。鼻は香をかゞぞ。耳は食時の報をきかぞ。共にその務る處をつせめずして。徒然せして。兩三日を過ぎけきぞ。身躰漸つかれて。終

に起臥せる力も。ふきに至れり。故
よ。腹はまゞ疲きざるよ。手足まづ
衰へたるとはふ
愚ふるかふ。手足等の活きい。心腹
の司るさをを知ぞーて。かくの如
き不平を發ー。恨む處の腹よるも。
己らさきに。衰弱せり

汝ラ。此理ヲ悟ルヿアラバ。我身ノ
教育ニ苦勞シ給フ。父母及師匠ヲ
バ。決シテ怨ミ侮ルヿ勿レ

第二

郊外ふいかに。雨ふるとて來れり
行人い東西よ迷ひ。南北よさわぎ
走れり。中に。一群の童子あるて。樹

陰に集り。靜に雨をさけ居ゐり
されい。學校の生徒ゝして。今日。た
まく休暇なるを以て。師ゝ從ひて。
遊歩に出たるなり
教師。童子をかへりみて曰。むかし。
太田道灌といひし人。狩ゝいで。今
日の如く。雨ゝ値て。歌をよみたり。

其歌。すさぶる秀逸ゝして。今も猶さきを賞せ
り。我も亦。ふかく
感嘆せるゆゑ
ゐに。汝等の
騒ぐを宥めて。茲ゝ
あり。此雨ながくい降る歟からば。

教育書院

ばらくにて。歌むべしとて。彼歌を吟誦し。其意を諭しなぞらへて。あまけるゝ。果て陰雲漸おさはり。洗ふが如き。天色といなまたりゝ。その歌ハ。「ゆそがぢハ。濡きざらましを。旅人のあゆよまはるゝ。野路のむらさめ」

教育書院

汝等。コノ歌ノコトヽロヲ。意ニ記シテ。不慮ノコトニ遇フト雖。ミダリニ騒ギ。惑フコト勿レ

第三

兄弟の娘あり。姉ハ十歳にして。妹ハ七歳ゝなまたり

姉ハ。天性順良にして。其才も亦さ

ぐれたる。妹をかしさき生れなきごゑさすがに幼兒のさゝやをるゆゑに。やゝもすれば危きさとをゝそゝ至れり

一日。學校より。かへるみちゝふて。石につまづき倒きたるはづみに。かへ持さる書物を。傍なるほりの

中へ。なげ入けきば。大にあわてゝ。されを取んとす

姉おぞろきて。其袂をとらへ。誰よ。心をさゝげゑて。我言をきけ。書物ハ。固に大切ふる物なきごゑ。人の命ゝよりかへがたしさの濠い。深くして。大人さら。容易く此ゝ。入るさゝを

を得ざまーてや少女の分をーて何とて書物を取るさいをを得んや家にかへらざ妾よく父母に請て彼書を求め得さす歟ー今よ至後かゝるさいをありとを能々我身を省みて決ーて危き所業をなさいを勿きと諭ーけきざをよ至か

ーこき少女なきざ忽ふーてその理ふ服ー悦びぬさみて家にかへれり

此所ハ裁縫場ナリアマタノ少女ナラビ坐シテ裁チ縫ヒセリ一人ノ男兒ハ器械ニヨリテ緣ヲヌヒ今一人ハヒノシヲカケ居レ

リ

凡衣服ノ裁縫ハ。女子ノ身ニトリテハ。缺クベカラザル業ナレバ。タトヒ其身。トミ榮エテ。親ラ此ワザヲナサズトモ。必コレヲ習ヒオクベシ。モシ此道ニクラキ時ハ。不便ナル1多カルベシ

マシテヤ。貧家ニ生ルヽ女子ハ。第一ニ務メ學ビテ。生涯ワスレ。失フコト勿レ

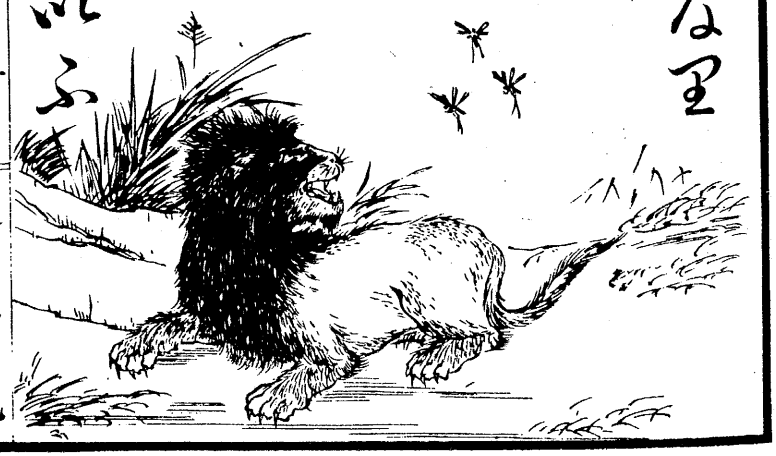
第四

人ゐかならば。長ぜる所と。長ぜざるとは。誤あり。我レその一事に達すとも。他人を見くだし。侮るべ

らず

さゝに獅子と蚊と勝負を爭ひさるをかしき話あり或とき蚊さゝにむかひて君は勇猛にして天下に敵なし故にけものゝ中の王なりといへり然れども吾よりはされを看るときは智惠ふかくして

なほ手ふり足ざるなりといへで獅子笑てさゝろとせば故より蚊くちばしを尖らして吾言を信ぜざれば請されをさゝろみよといふ



さゝに至て獅子奮然として大に
いかる汝なんぞ身まを應ぜぬ大
言をいだきやいざ來れ後悔さふ
とて牙をならし爪をとぎてまち
かまへさり
然きども蚊小ふして勇を施さと
さろふし蚊たちはち耳にいる又

その鼻に飛び入てしばくさいきを
刺しあれで獅子頭をうざかし耳
をかき大息して曰今わき始てた
たかひハ力にあらずして法を得
るに在るさいをを悟るとして終
に降參なしたるとと云
獅子のさいをば極めてよしさきで

おのゝ強ーとて。決ーて他人を。あ
ふどるさゝなこのゝ

第五

童子ヨ。汝詩ヲ作リ。歌ヲ詠ム
コトヲ。知リタリヤ
以まだ志らず
然ラバ。汝ニ語リキカセン

詩ニハ。五言絶句。七言絶句ナド。イ
ロくナルスガタアリ。五言絶句ト
ハ。五字ヅヽ。四句ヲ連ネテ。一首ト
ナシ。七言絶句トハ。七字ヅヽ。四句
ヲ合セテ。一首トナス
歌ハ。五もじと七文字とを。五句あ
ハせて。一首となせるその第一ハ。

五文字第二ハ。七もじ。第三ハ。五文字。第四ハ。七もじ。第五ハ。七文字。合て三十一もじなり

第一より。第三までを。上の句と。第四第五を。下の句と。ゝふ

詩ヲ作ルコトヲ。學ブトキハ。大ニ讀書ノ助ケトナリ。歌ヲ詠ムコトヲ。習フ時ハ。其詞タヾシクナリテ。トモニ文事ノ補ヒトナル

家を建るにハ。其地高くして。燥きたる所をえらび。又よく樹木を。養ふべし。其地たかくして。かわきたる所ハ。空氣よく通じ。樹木茂りたるとき。ハ。人の心もさわやかなり

してたのづから氣風も高くなる
ゆくゑの故にその地を擇びて住
べきなり

第六

一日老人童子ヲイマシメテ曰汝
ラ途中ヲ走リ回リテアツサニ苦
ムコトアリトモ其マヽ冷水ヲバ

飲ムベカラズモシ渴シテ堪ガタ
キヿアラバ少シノ間木ノ蔭ナドニ
テ暑サヲ消シテシカシテ後ニ飲
ムベシトゾ教ヘケル

童子去リテ公園地ニ至レリ
時に炎熱やくゞ如し傍をかへり
みるに泉水あるに老松枝をたれ古

杉日をおほひたゝだる。水ハ苔をうるほし。その清きさゝやゝふ。ゐこゝらず。童子大に悅び。老人の誡を忘れて。あくまで水をのみたゞし

が。家にかへゞてのち。果して病を。おこしたゞ

水ハ。動物植物ヲヤシナフニ。缺クベカラザル。モノナレドモ。ソノ用法ヲ過ツトキハ。害トナルコト。斯ノゴトシ。此童子。老人ノ言ヲ守ラバ。何トテカ、ル病ヲウケンヤ。ス

ベテ教ニ背ク者ハ。福ヲ轉ジテ禍トナスコト。唯コノ水ノ害ノミニハアラザルナリ

新編小學讀本第七畢

板權免許 明治十九年一月廿五日
再版御届 同年五月廿八日
定價金五錢五厘

編輯者 愛知縣士族 三尾重定 神田區五軒町十九番地
出版者 東京府士族 岩田富美 淺草區西鳥越町十番地
出版并發賣人 東京府士族 吉澤富太郎 本所區松井町三町目十番地

教書眞版章